氏　　名	吉田　妙子（よしだ　たえこ）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博乙術第6号
学位授与の日付	平成22年9月1日
学位授与の要件	学位規程第6条
学位論文の題目	**日本語動詞テ形のアスペクト**
審査委員	主査　今泉　喜一
	副査　金田一秀穂
	副査　吉川　武時

学位論文の要旨

本論文は、日本語動詞テ形に後接して文法化した10種の補助動詞、テアル、テイル、テイク、テクル、テミル、テオク、テシマウ、テヤル、テクレル、テモラウの言語現象を観察することにより、全章を通じてテ形の完了のアスペクト性を論じる。

序章第1節ではまず、動詞テ形を「V-Te」、連用中止形を「V(i)」と表記することを述べた。次に「補助動詞」についての先行研究を当たり、本稿で論じる「補助動詞」の範囲を、「現代語の動詞テ形に接続する動詞で文法化が進んでいるもの」と定めた。また、管見ではテ形のアスペクト性を論じたものは見当たらないので、本稿でこれを論ずる意義を述べた。方法は、基本的に生成文法である。

第2節「動詞の二つの中止形「V-Te」と「V(i)」では、テ形と連用中止形の比較において、テ形にはアスペクト性があることを論じた。まず、テ形と連用中止形は、その用法において完全に相補分布をなしていることを7点において証明した。さらに、2文を繋ぐ接続助詞としての用法でも、「V-Te」は前項と後項の前後関係を表すが、「V(i)」は前項と後項の並存関係を表すことから、統語的にも、「V-Te」はアスペクト性を持つことがわかった。また、形容詞を2つ連続して名詞を修飾する装定用法の場合、「V(i)」を用いれば単に名詞の性質の列挙になるが「V-Te」を用いると前項形容詞と後項形容詞の時間的関係性が生じる。文体的にも、接続助詞に「V(i)」を用いると限りなく静的な普遍性へ向かうが、「V-Te」は限りなく「動的な前進」へ向かうという傾向があることを、実際の文学作品を紹介しながら論じた。

序章第3節「テ形の用法分類再考」では、テ形の分類基準を生成文法の理論を使っ

て書き直した。分類の作業は決して分類のための分類ではなく、分類する中でテ形のどんな用法が最も基本的であるか、つまりテ形の意味素性を明らかにすることが重要である。テ形の基本的な意味素性は「継起」であり、それはテ形のアスペクト性によるものであると思われる。まず、既存の分類である「並列」と「先行」を分析した。テ形接続をする文を項構造によって分析し、テ形による「先行」の文は前件と後件の間に統語的・語彙的連関があるという結果を得た。そして、「並列」と言われる用法は「先行」の時間性が漂白されたものであるという結論を得た。さらに、Perlmutter、Zeno Vendler、金田一の動詞分類を参考にして、「手段」「原因」「付帯状態」と呼ばれる用法の言語的マーカーを示し、引き続いて動詞の「有界性」から「原因・理由」「結果」の用法を解明した。さらに、最も時間性・内的関連性のない「並列」から最も時間性・内的関連性を有する「原因・理由」までの連続性を、語彙概念構造からたどっていった。最後にテ形の各用法の相互関連を加味しながら、接続助詞のテ形の用法を再分類した。

第1章「補助動詞の文法化とテ形のアスペクト性」では、冒頭で、①なぜV-Teには10種に代表される動詞しか後接しないのか、②なぜこれら10種の動詞は、V-Teに後続するとアスペクト性を帯びるようになるのか、という2つの問題を掲げ、最もアスペクト性の強いと言われるテアル・テイル・テイク・テクルの文法化の過程を示した。その文法化の過程はテアル・テイル・テイク・テクル、それぞれの語彙概念構造と密接な関係があることを明らかにし、冒頭の2つの疑問はひとえにこれらの補助動詞のテの部分にアスペクト性があるためである、ということを論じた。

第2章「テアルとテイルの相互交渉と「受身形+テアル」構文の出現条件」では、とかく混乱の多いテアルとテイルの関係を整理した。冒頭で、①「Vt +テアル」構文は、いかなる成立条件を持つか、②「Vt +テイル」文と「Vt +テアル」文はいかに相互干渉するか、③「Vt +テアル」構文において、ヲ格内項を取る場合とガ格内項を取る場合では、意味上のいかなる差異があるか、④受身文と共起し得るテアル構文の条件は何か、という細かい問題を掲げた。そして、前接動詞の種類を、①無対他動詞、②有対他動詞、③着点項を持たない他動詞、④非意図的な動詞、⑤境遇性を持つ動詞、に分け、それぞれの場合におけるテアル構文とテイル構文の相互乗り入れ作用の実態と原因を論じた。さらに、文を、①現存文、②意図達成文、③伝達動詞を使った文、に分け、それぞれの場合における「他動詞+テアル」文におけるガ格とヲ格の交替を論じた。さらに、最も複雑な受身文に接続するテイルとテアルについてその現われ方の条件を述べ、さらに否定文における現われ方も論じた。

第3章「テオク・テミル・テシマウのアスペクト性とモダリテイ性」では、第1節でテオクを、第2節でテミルを、第3節でテシマウをそれぞれ述べ、第4節ではこれら3種の補助動詞を一括して扱う所以を述べた。これらの一見アスペクトとは無縁に見える補助動詞は、いずれもモダリティを有している。テオクの「後続事態への配慮」

というモダリティは、「動作効力持続性」というアスペクトを有するゆえである。テミルの「決着留保」という心的態度は「動作結果の静視」というモダリティによるものであり、それは行為の結果が静止しているというアスペクトによる。テシマウは語彙自体が完了のアスペクトを持つものであるが、完了の結果がよいか悪いかによってモダリティが発生する。

第４章「テモラウ構文の統語的制約と非対格性検証能力」では、生成文法の非対格仮説のテストとされているテモラウ構文についてその理論的根拠を検討した。影山（1996）は「依頼者→依頼相手（補文の外項）→依頼の実行」という依頼使役構文の構造を示し、竹林（1998）は「「～にＶしてもらう」構文における「ニ」格句は、「Ｖしてもらう」主体（＝受益者）がそこから益を受ける授益者である」と定義しなおす。また、語用論的な面では、許（2000）は依頼使役文を「依頼テモラウ文」と「非依頼テモラウ文」に分け、後者は迷惑を表す文が多いとし、益岡（2001）は、依頼使役文を「使役型てもらう構文」と「受動型てもらう構文」に分けて、前者には恩恵性の意味はあまり出てこないとする。いずれにしろ、影山の定義は依頼使役文の一部の用法でしかなく、最初から非対格動詞を排除した定義のし方だということになる。本章では高見・久野（2002）による批判を踏まえ、非恩恵テモラウ文における非対格動詞、テモラウ表現を支える構文的要素、テモラウ文が埋め込まれている文の制約などを検討し、最終的に竹林（1998）の説に賛同を示した。

第５章「日本語の授受表現の階層性―その互換性と語用的制約の考察から―」では、テヤル・テモラウ・テクレルを整理した。テヤル・テモラウ・テクレルは「ある行為をして、その結果の利益を誰かに授受する」という比較的単純なアスペクトを持つのみで、問題の中心は待遇意識の差異にある、授受の方向性がまったく反対に見えるこれらの補助動詞が、実は互換性と階層性を持っていることを明らかにした。

また、章構成の関係で序章第２節にて論じ残した部分を「補遺」として、第６章に収めた。「補遺１：「付帯状態」のファジー性」では、接続助詞としてのテ形の用法のうち、最も複雑で「ゴミ箱的」といわれる「付帯状態」の用法を整理した。「付帯状態」の複雑さは、①より副詞化した用法、②時間的先行への連続、③起因的先行への連続、④言い換え前触れへの連続、⑤ナガラ節との関係、など、他の用法・他の文型への連続性を持つことにある。そこで、「付帯状態」を、①テ形節の事態と主節の事態が同時的か継時的か、②テ形節の主体と主節の主体が同種か異種か、の２点から分類し、仁田（1995）を参考にして総合的に「付帯状態」の用法を再分類した。

第７章「補遺２：理由節を作るテとカラ・ノデ」では、理由を表す節として、テ形節・カラ節・ノデ節のそれぞれの異同を述べ、比較の媒介として主節文末のノダを用いた。カラは結果事象分析から原因事象発見への遡行型、ノデは、原因事象から結果事象への直進型、テは原因から結果への自然移行型、という特徴づけをした。

そして、以上の考察を以て、「終章」では、動詞テ形には完了のアスペクトがある

ことを明確にした。

審査結果の要旨

［論文の内容］　本論文は日本語動詞のテ形に開始と完了のアスペクトがあることを、補助動詞の観察から明らかにしている。方法的には主として生成文法理論に依拠している。まず①動詞のテ形を連用中止形との対比において考察し、テ形がアスペクト性を持ち、連用形中止形にそれがないことを論じている。また、両者が用法において相補分布をなしていることを７点において明らかにしている。次に②テ形の意味素性を開始と完了のアスペクトに起因する「先行」としてとらえたうえで、生成文法理論と、Pearlmutter や Vendler 等の動詞理論に基づいて考察を進め、テ形の再分類を行った。論者のいう「項補充作業」が効果的に機能している。③このテ形の先行性は、特にアスペクト性が強い補助動詞テアル・テイル・テイク・テクルによって確認できるが、これらの補助動詞がどのように文法化したかについての考察も行っている。④テアルとテイルは構文形成において関係が深く、異同の問題も多い。論者は受身形＋テアルの形式も研究対象に加えたうえで、テアル・テイルの関係を整理している。⑤ほかの補助動詞テオク・テミル・テシマウはアスペクト性に加えてモダリティ性が強いが、この３者についても論じている。⑥残る補助動詞テヤル・テモラウ・テクレルについては、授受の補助動詞としてほぼ独立した形で扱っている。

［論文の意義］　動詞テ形のテは接続助詞と呼ばれ、その名のとおり、接続関係においてのみ論じられることが多かった。テそのものが研究対象となることは少なく、ましてそのアスペクトについて正面から論じられることはきわめてまれであった。本論文がテに注目し、その表現するアスペクトが「開始」と「完了」であることを明確にしたことに大きな意義が認められる。

［論文の評価］　論者は多数の先行研究を批判的に検討・受容しつつ、生成文法理論等に依拠して考察を進めてきた。随所に論者の創見がちりばめられた本論文は、本テーマに関する論者の 15 年以上にわたる研究の結晶として高く評価できる。